



生きること（人生）は 品性を完成すること

今年も僅かとなりました。一年に春夏秋冬があるように、人生にも、青春、朱夏、白秋、玄冬と季節が巡っていくのが自然の摂理です。真冬なのに春のように粹がっても無理があり滑稽なように、玄冬には玄冬の暮らし方を見出すのが心地よいことだと気づかされます。そして、歩んできた道を振り返り、思い出を噛みしめるのは、決して後ろ向きではないと思います。回想にはお金も体力も要りません。それどころか、色々なことがあって今生かされて生きている事実の「ありがたさ」に気づき、それがまた次への一步を与えてくれることでしょう。

* * *

「人生の目的は金錢を得るに非ず、品性を完成するにあり」という内村鑑三の言葉が、人が人を格付けするかのような”横綱の品格”という言葉に耳にして思い出されました。

品格とはある種のランクづけで、品性は一人一人の個性であり人間性のことです。品格と品性は、似ているようですが大きな違いがあります。

仏教も「品」を説いています。下品も、「げひん」と読めば、言葉づかいや態度、服装などを

日常的に「人の尺度」で判断して用いられています。

しかし、これを仏教では「げぼん」と読み、『観無量寿経』という經典の言葉で、浄土に往生する者を、その生き方に応じて、上品（じょうぼん）、中品（ちゅうぼん）、下品（げぼん）に分けた意味になります。

いくら外面を整え、社会的、教義的に、言葉づかいを気をつけていても、それで上品とは言わないのです。あくまでも、仏の教えにどれほど誠実であるかが、上品と下品の分かれ目なのです。現代社会は経済効果を優先し、本来のはたらきを軽んじ、生命までが利用価値で計られるようになってしまっています。上品どころか、お互いを欺き傷つけあう生き方であり、仏の教えからは全くもって遠いというほかありません。

* * *

この下品について真摯に向き合われたのが親鸞聖人でした。それは下品の姿に、偽らざる人間の現実を見たからでした。お互いに傷つけ合いながらも、なお、人として生きる道はあるのか、親鸞聖人はこの気づきをご自身に問われたのです。

下品な者は下品を自覚することによって、自らの愚かさを教えられ、はじめて生きることの悲しみを知ります。そこに仏教を抛りごころとして歩いていく

人生がはじまり、親鸞聖人の「悪人正機」の根拠もここにありません。

それは、悪人でもいいのだ、下品でもいいのだ、と開き直すことではありません。お互いの愚かさを知るがゆえに、いよいよ許されて生かされていることに気づかされていく中でその人間の品性が育まれます。

親鸞聖人のお念仏のみ教えは、まず自分を見つめ、そこからこの世のあり方を問うていくという私たちの生き方の背骨です。それが自分や他人が上品か下品かこだわるよりも、はるかに大事なことなのです。

老いも若きも誰もが年を重ね、その間には病を得たり、大切な人と別れたり、困難に直面することも起こります。そういうときに試されるのが、その人の育んできた品性だと思います。苦難に遭うことは悲しく辛いことですが、そこに忍耐が生まれ、その忍耐も品性を育みます。いのちは喜び、悲しみ、苦悩とともにあるものですが、そんないのちをいただいて生きる私たちには、根源的な問題や生きる意味に向き合い、他人との比較を離れ、今できる自分の役割を見つけて歩いていく仕事が託されています。また共々に歩んで参りましょう。皆さまにはどうぞご自愛いただきまして新しい年をお迎え下さい。 合掌

奏庵年末法座

日時
12月26日(火)
午前11時より
「真宗宗歌」
正信偈
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとぎ

おかげさまで平成29年度も最後のお集まりを迎えさせていただきます。階段を上ってお参り下さり、あたたかいご懇念をいただき、和やかなご法座にさせていただきましたこと、心よりありがたく御礼申し上げます。

寒波襲来で、より気忙しく感じる年の瀬ですが、どうぞ無理せず気をつけてゆっくりとお参り下さい。



平成30年度年回忌

年忌	没年
1周忌	平成29年
3回忌	28年
7回忌	24年
13回忌	18年
17回忌	14年
23回忌	8年
25回忌	6年
27回忌	4年
33回忌	昭和61年
37回忌	57年
50回忌	44年

日常的に仏事に接することのできていた故郷から離れ、首都圏に家庭を築いてきた世代の方々も多くが仏さまとなられ、時代は益々少子高齢化へと加速し、ご法事を勤める立場の者もご先祖とのつながりが薄れていく中で高齢者となって、法事に負担感を感じることがあるかもしれせん。

亡くなられた方々は、大切な家族を案じることはあっても、崇ったり迷ったりすることの決してない仏さまです。

ご法事は、亡き方々が仏となって、有縁の人々に安心して迷わず生きよと常に働きかけ導いて下さっていることにあらためて気づかされ顔かせていただく尊い仏事です。

日時や形式は重要なことではありません。自らの法縁として味わってくれることが仏さまの願いなのです。

どうぞ心から大切にお勤め下さい。

医者で俳人としても活躍した方の【春愁や老医に患者のなき日あり】という句が大好きだと五木寛之の著書にあった。「春憂」は春の季語だから窓の外には桜が咲いているのだろうか。患者が来ないのを寂しく思っている姿ではなく、陽が差し込む診察室の静かな時間を味わう穏やかな老医が映像となって浮かぶ。■金満なのはほんの一部なのに、世間では「儲けている」と思われている医者や坊主だが、どんな時も悠然と生きることができなければこの職についての甲斐はない。宗教は違えど有名神社の神職の家族間での凄惨な事件も嫌なものだったが、「積年の怨念」、「永遠に崇ってやる」という言葉、凶器が日本刀ということに、表現は適切ではないかもしれないが、それなりに「らしい」と感じた。■ワイドショウ的に展開したい番組でコメントをしていたのは、あまり好きではない宗教学者だったが、「これは、要するにお金を生む神社ゆえの怨念で、全国でこのような潤沢な寺社は2%に過ぎず、65%以上が300万以下の年収がやっとで何とか護持されていて、後継者問題もほとんどが貧しさゆえなのは、本来の寺社は利益を追求して生まれたものではないからだ」とだけ解説したのは簡潔だったと思う。■当庵には税務署調査が入ったばかりで、あまりのどんぶり勘定と採算の取れないことを続けていることに、「なぜそうまでしてするのか」と呆れられ、世話になっている会計士には「最悪だ」とお目玉を食らい、赤字でも黒字でも帳尻が合っただけの帳簿なのだ、この歳になってやっと理解したことだった。■だからと言って、帳簿付けを嬉々としてやり、びっしり埋まった予定表を自慢げに見せるようにはなりたくはない。生まれ育った寺は現金には縁がなかったが、不幸でもなく、恥ずかしいと思ったこともない。経済観念のいい加減さは少々反省すれど、逆に言えば、多くのお寺がこんな風だからこそ護持されてきたことを、潤沢な寺社が多いこの地域の税務署にも何となくだが納得してもらえたようで、貧乏寺だからこそそのやる気がまた湧いてきた。これからも宜しく！ Norimaru